

メンタリングでの 学習指導案の協働作成による「『子ども主体の授業』の開発・実行に向けた工夫」ができる教師の育成

横浜市立緑園東小学校

尾澤 知典

1 解決すべき課題

本校の教師は、①「児童の実態・課題把握が難しい」②「児童主体学習の意図・効果が分からない」③「本校の授業形態（子ども司会型）の授業設計の仕方が分からない」④「もっと授業をよくしたいがその方法が分からない」という課題を抱えている。

2 目的や背景

本校の指導方針である「児童自身が主導していく学習形態」に対する意義の理解やその形態に即した授業を設計することが難しいという困難を抱えた教師がいる。

また、本校では教師主導の学習ではなく、児童自らが課題の解決のために「テキストの収集から学習の練り上げ・発信までを行なう」児童主導の課題解決型の形態を多くの教科で採っており、特に練り上げの部分では児童が司会をしながらクラスの意見をまとめている。この授業を行うためには、従来の教師主導の授業観からの転換や子どもたち同士で学習を進める時の発言内容やまとめに向かう展開と思考の流れを予測した授業設計の力が必要となる。ところが、これの点を全ての教師が理解しているとはいえないため、全員が手立てを共有することが求められる。

3 活動内容（教師同士による協働での指導案作成）

本校の課題解決のために「校内授業研究」における本時指導案を、学年の教師が協働で作成する活動を実施した。ここでいう、「協働」とは、一人が作成した案をもとに他の教師が「検討」して作り上げるものではなく、協働者の意見を交えながら0から作り上げる活動を指す。なお、本校は全学年2クラス編成（個別級を除く）のため、協働は2人で行った。

4 活動の成果

昨年度・今年度を通して、全ての学級の先生が協働指

導案作成に取り組んだ。その結果、書く役の教師：相手の案を「聞く＋書く」ことで、聞くだけの受身的な「なんとなくわかった気になっている」の状態から、相手の思考の流れを追うことができ、「わからない部分に気づき・自分が実施するにはどうするか」というように、相手と自分を重ねて実際の授業をイメージする主体的学びになっていた。また、分からないことは安心してすぐに相手に聞けるので、学びが深まった。さらに、児童の実態とリンクした学習展開の具体を体感できたことと、児童主導の学習展開の方法を自ら考えて実践したことで、子ども達の成長を実感でき、児童主導の学習の良さが理解できた。

話す役の教師：相手とのやりとりをすることで新しい案が思いついた。相手がつまずくポイントを理解しそれを克服する方法を考えることが、逆に自分の指導の深化につながっていた。また授業展開を声に出して語り、若手からの反応を得ることで、授業を設計すると同時に自分のふりかえりの効果もあった。

両方の教師：授業での活動の意図を共有しながら作り進めることができたので、互いに改善点を頻繁に交換し、授業改善を通した学年づくりができた。授業計画には採用されなかった意見も共有できているため、深いレベルでの共通理解ができていた。また、指導案作成に対する精神的な負荷が減る、や相手が大切にしているところが分かる。さらに、両者にとって自分ごとこの指導案が出来上がったという効果が、事後のアンケートの自由記述の欄より確認することができた。